

松岡俊氏

×

白井敬祐氏

×

葛西一成氏

経理担当者の働き方改革 ～生成AI活用～

企業の経理部門での実務経験を持つ経理専門家の3氏が、
これからの経理担当者の働き方について議論・展望しつつ、
経理業務における実践的な生成AIの活用方法を、
動画を交えて紹介します。

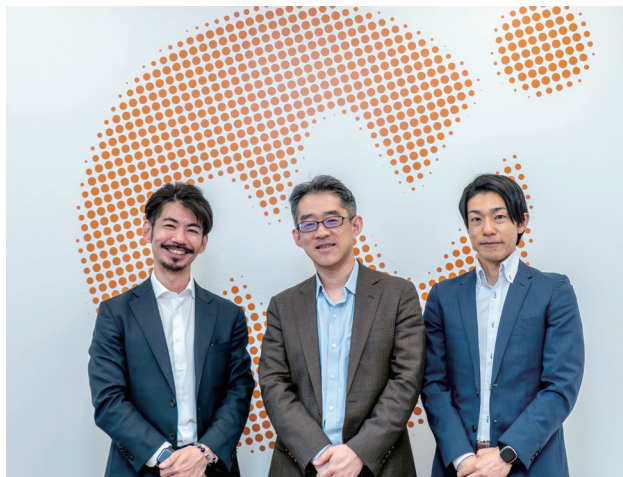


松岡

〈短期的視点〉 AI活用は何かから始める？

I 生成AIが変える 経理業務の未来

『企業実務』調べによると、中小企業のバックオフィス担当者のうち、生成AIを業務で利用している管理職・一般社員の割合は、それぞれ12・6%、9・5%と、まだまだ少ないのが現状です（※1）。
また、日清食品の事例では、AI活用による部門別の業務改善効果で、全3万25



左から白井敬祐氏、松岡俊氏、葛西一成氏

白井

91時間の年間削減時間中、経理部が占めるのはたったの20時間で最下位というデータも公開されています（※2）。
これらを踏まえて、経理部門が生成AIを活用して業務を変革していくには、まずはどのようなマインドセットや具体的な行動が必要になるでしょうか。
淘汰される側ではなく、AIを使いこなす側に回るといふマインドが非常に大事だと思います。

現状はまだまだ生成AIの黎明期であり、生成AIを使いこなして自身のスキルや能力にプラスアルファした働き方をできている人は多いとはいえません。いまは先行者利益を獲得する絶好の機会です。

そして、AIを批判したり、使わないでおこうとする姿勢では、時代に取り残されてしまうでしょう。まずはAIと共存し、使いこなす側になるために、とにかく「触ってみる」のが一番です。

AIエージェント（使用者に代わってタスクを自律的にこなすシステム）のように作業をすべて代行してくれるツールが登場すると、定型作業しかしていない人材は、仕事がなくなる可能性が出てきます。また、AIがビジネスシーンでの戦略まで考えてくれるようになると、自分の存在意義そのものが問われることになります。

まずは積極的にAI技術に触れてみる、ということですね。葛西さんはいかがでしょう。

松岡

※1 日本実業出版社『企業実務』2025年4月号掲載の000号
※2 日清食品ホールディングス「生成AI活用の取り組み」(https://www.nissin.com/jp/company/library/event/pdf/20240314_2.pdf)

葛西

まさに「試してみる」ことが、AI活用の第一歩ですよね。

とはいえ、経理として何から試せばいいのか、という疑問もあるかと思いますが。たとえば、これまではGoogleで会計処理や税務処理を検索していた場面、一度AIに問い合わせてみるというのも1つです。

「意外と使えるな」という発見を積み重ねていって、徐々にAIを活用する場面が増えていくのではないのでしょうか。

白井

メール対応も、生成AIを業務に導入する糸口になりやすそうです。たとえばメール全体をAIに投げ込み、「この人は何が言いたいのか」と尋ねると、驚くほどの確に要約してくれます。

松岡

確かに、怒りのこもった長文メールや要点がわかりにくいメールが来たとき、AIで対応を省力化する、というのはよいスタート地点かもしれません。

私もGoogle Workspaceを使っているのですが、メールの右側に表示されるパネルでAIに要約してもらい、そのまま返信文まで書いてもらうというのを日常的に行なっています。

葛西

小さな成功体験が、「意外と使える」という気づきにつながり、徐々にいろいろな業務でAIを活用しようという発想が生まれるのでしょうか。これまでは何でも検索すればよいと思っていたのが、「AIに聞いてみたほうがよいのではないか」と考えるようになる、というイメージですね。

〈中期的視点〉 AIで業務はどう変わる？

松岡

これまでは、生成AI導入のほんの第一歩についてお話ししてきました。社会全体でAIの業務利用が導入の段階を超えると、経理業務はどのように変化していくと思いますか。

白井

人間が、自らの手でいわゆる作業をこなしてもよい世界が訪れると考えています。現状のAI活用は、調査業務等が中心となつていきます。しかし、ユーザーが意識せずとも、AIがソフトウェアやサービスの背後で稼働しているのが当たり前の世界へと移行していきます。

たとえば最近登場したClaude CodeのようなAIエージェントは、チャット画面の横にコード画面があり、たとえば「こんなソフトをつくってほしい」「こんなExcelシ

葛西

ートをつくってほしい」と指示すると、AIが自動でコーディングを行ない、作業をすべて実行してくれます。

このようなことがあらゆる場面で実用化した世界では、会計システムもすべてAIが担うようになるのではないのでしょうか。

仕訳帳を見て間違いを指摘したり、領収書から仕訳を作成したりするような業務は、おそらくAIが自動で実行できるようになるでしょう。

AIが人間の脳や腕となつて、チャットでの指示だけですべてを処理し、人間は最終的な確認と承認を行なうだけ、という業務形態へと変化していくと予想しています。このような変化が、中期的に経理業務の負担を大きく軽減するでしょう。

白井さんもおっしゃったように、現状でもAIが組み込まれつつあるオフィス製品に加えて、今後は会計システムやその周辺システムへもAIの組み込みが加速すると予想しています。

経費精算システムや請求書受領システム、契約書管理システムなど、あらゆるシステムにAIが組み込まれていくでしょう。その結果、ユーザーはAIを使っていることを意識せずとも、日々の業務のなかで当たり前のようにAIの恩恵を享受できるようになる、というのが中期的な未来像だと考えています。

松岡

そうですね。短期的には、白井さんや葛西さんのように、個人が意識を高く持ち、



株式会社マネーフォワード 執行役員 グループCAO
公認会計士・中小企業診断士

まつおか しゅん
● 松岡 俊

1998年ソニー株式会社入社。各種会計業務に従事し、決算早期化、基幹システム、新会計基準対応プロジェクト等に携わる。2019年マネーフォワードに参画。「月次決算早期化プロジェクト」の立上げや、コロナ禍の「完全リモートワークでの決算」など、各種業務改善を実行。

積極的にAIを活用することが重要ですが、組織全体としてAIの恩恵を受けるためには、経理で日常使用しているシステム自体にAIが組み込まれていくことが理想です。

たとえば、当社サービスである『マネーフォワードクラウド連結会計』では、グループ会社の利用言語を問わず、あらゆる勘定科目に対して、対応する連結科目をサジェストしてくれる機能があります。

これはAIがすでに組み込まれている例であり、着実に手作業が減少する方向へと進んでいます。

このように大量のデータを取り扱うシステムにAIを組み込み、上手く作動させるには、さまざまな業務データを「セントラル」に集めておくことが重要です。

たとえば経費精算の不正チェックでは、経費データに勤怠データを連携させて、「勤怠のない日付に交通費の経費精算があったらおかしい」といったように、複数のデータを組み合わせて分析することでAIの精度は格段に向上します。

AIを有効活用するうえでは、ある程度のデータがそろっており、かつ単体では価値が出にくい情報も組み合わせることで、より大きな価値を生み出せるようになるのです。

このような統合的なデータ基盤を構築することが、今後のAI時代に備えるうえで非常に重要だと考えています。



白井敬祐 公認会計士事務所
公認会計士

● 白井 敬祐

公認会計士、CPA 会計学院講師、監査業務、IFRS コンサルティング等に從事した後、リクルートHD 経理部門を経て独立。『公認会計士 YouTuber くろいちゃんねる』を運営。著書に『伝わる経理のコミュニケーション術』『経理になった君たちへ』（税務研究会）。

〈長期的視点〉 「業務消滅」と経理人材の 新たな役割

松岡

AI エージェントがこのまま進化・普及していけば、必然的に既存の業務が消滅したり、人間に新しい役割が求められるようになると思います。

定型作業はほぼなくなり、従来求められていた労働の在り方にも変化があるでしょう。このような時代に向けて、経理人材はどのように準備していくべきでしょうか。

白井 長期的な未来像としては、「指示出し」と「確認・判断」だけが人間の仕事になると考えています。

思考することすらAIがやってくれる時代が来るかもしれません。そのため、「指示出し」の能力、すなわちプロンプトエンジニアリングのスキルは非常に重要になってきます。将来に備えて、いまのうちから

プロンプトのコツを学ぶために、AIに頼っておく必要があります。

そして「確認・判断」をする際には、その内容が正しいかどうかを判断できる知識が不可欠です。したがって、専門知識は引き続き非常に重要となります。

今後は、経理の採用においても「AIを使った経験がありますか」といった項目が応募条件に加わる可能性もあるでしょう。そのための、指示出しと判断ができるように、スキルを蓄積しておかなければなりません。

葛西

白井さんのおっしゃるとおり、指示出しと判断の価値はより大きくなると思われますが、「指示出し」は特に難しいですよ。

一種のセンスも必要とされます。実際にAIを使ってプロンプトを書いてみるとわかりますが、よいプロンプト、すなわちわかりやすい指示を出す、AIは期待どおりの結果を返してくれます。

いままで単純作業に重きを置いていた人材がいきなりうまくできることではありませんが、人間が重視する価値が「作業」から「指示出し」「確認・判断」に変わっていくのは間違いありません。

松岡 やはり、単純作業よりは専門知識を活かして、AIに適切な指示を出せるようになるという点が重要ということですね。

確かに、AI エージェントがさまざまな処理を自動化したとしても、たとえば会計基準の改正や税制改正といった制度変更が

あった場合、AIEージェントにそのプロセス変更を適切に指示できるのは、やはり人間です。どこまでいってもAIEージェントに指示を出す役割は残るでしょう。

最終的に、現場レベルの作業はAIEに代替され、マネジメントや高度な判断を行なう人材の重要性が増すと考えられます。

AIEを管理・監督し、高度な判断を下すためには、会計・税務などの専門知識が引き続き不可欠です。さらに、法律や会計基準等書かれていないプロセスや実務慣行の知識の価値も上がってくるでしょう。

常に変化する時代に対応するためには、専門性を高め続ける努力が求められます。専門誌などをしっかりと読み込み、タイムリーな情報をキャッチアップすることです。そして、その知識をいかにAIEエージェントなどに「織り込むか」という点が、今後の経理にとって非常に重要なポイントになるのではないのでしょうか。

II 経理の専門家は 生成AIEをどう使うか

Geminiで資料作成・分析

松岡

後半では、私たちがどのように業務でAIEを活用しているか、紹介します。まずは私からGeminiについてお話ししますが、

ここでの作業の多くは、ChatGPTでも実現可能だと思います。

経理業務では、PDFのような構造化されていないファイルからデータを抽出・構造化する作業が非常に多く発生します。

たとえば、当社のベトナム子会社の税務申告書をGeminiに添付し、日本のタックスヘイブン税制の申告書別表を作成するのに活用しています。複数のファイルをまとめて投入し、構造化してもらうことで、さまざまな業務に応用できます(1)。



1

松岡

次に、ポジションペーパーの作成です。経理業務では事実関係のまとめが非常に重要ですが、複数のファイルに情報が散らば



IS経理事務所代表
CPAラーニング講師
葛西 一成
かさい かずなり

上場企業2社で経理部長を経験後、独立。上場企業の決算業務フォロー、会計システム導入支援、キャリア支援、執筆活動に注力。Xではフォロワー1.8万人超の「経理部IS」アカウントにて、経理に関する情報を発信。著書に『組織を整え人材を活かす強い経理の作り方』(税務研究会)ほか。

っていると、まとめるのに大変な労力を要します。ファイルをすべてGeminiに投入し、事実関係をまとめてもらうだけでも、作業が格段に楽になります。

また、有価証券報告書のチェックのようなテキストベースの作業も、Geminiにお願いしています。

さらに、重要な会計基準や税法について、Geminiのディープリサーチ機能も活用しています。たとえば、リース会計基準の改正に伴い、非常に多くの周辺基準も改正されています。人力で1つひとつ変更点を確認するのは大変な作業ですが、ディープリサーチ機能を使えば、変更点を一覧でまとめてくれます(2)。

このディープリサーチでは、インターネット上での調査だけでなく、会計データをGeminiに読み込ませて増減分析を依頼することも可能です。詳細な増減の説明を求めたり、決算短信を読み込ませて「データのインサイトをください」といった漠然としたプロンプトでも、グラフ化するなど非常に見やすいかたちで分析結果を提示してくれます。競合他社との比較など、インターネットで検索しないとわからない情報も、合わせて表示してくれます(3)。



2



3

このディープリサーチは、難しい会計基準や税法を、経理担当者以外の関係者にわかりやすく図などで説明するシチュエーションで非常に役立ちます。

また、先程の決算短信の例のように、会計データという数字の羅列を経営者が理解しやすいかたちに加工することで、経理が持つ情報の価値を大きく向上させることができます。

オフィスツールと生成AI

松岡

最近のトレンドとして、AIがさまざまなオフィスツールに組み込まれています。

たとえばスプレッドシートでGeminiを使用するとき、右側パネルにチャット画面が表示されます。「種類ごとに金額を集計する関数を考えてください」と依頼すると、簡単に数式を提案し、実行までしてくれます (4)。

ドキュメントでも同様に、音声文字起こしした内容を要約したり、箇条書きにしたり、よりフォーマルな言い方に修正したり、といった文書の加工が可能です (5)。



4



5

メール作成 (6)、プレゼンテーション (7)、会議のスケジュール調整な

ど、さまざまな場面でAIがツールに組み込まれており、当社でも積極的に活用しています。



6



7

なお、経理業務における生成AI活用で最も懸念されるのは、情報漏えいのリスクです。重要な情報をAIに投入することに躊躇するケースも多いでしょう。

当社ではGoogle Workspaceという法人契約環境を利用しており、情報が学習されないよう設定しています。AIをビジネス利用するうえでは、まず入力データが学習に利用されないように設定すること。会社の側でも、AIに入力してよいコンテンツの範囲に制限をかけること。このようなルールを会社としてしっかりと示すことで、メンバーが安心してAIを活用できると考えています。

NotebookLMで会計基準のチャットボット作成

葛西

NotebookLMでは、さまざまな情報をまとめて取り込み、オリジナルのチャットボットを作成できます。

たとえば、リリースに関する会計基準はも

ちろん、税制に関する情報など、著作権法の許す範囲であらゆる情報をNotebookLMに取り込みます。さらに必要な情報があれば、外部検索からも情報を取り込んで、その情報を基に回答を生成してくれる生成AIサービスです (8)。



8

葛西

このようにして構築したチャットボットは、会計基準から税務に関する情報まで、取り込んだ情報に忠実に会話できるようになります。このため、いわゆる「ハルシネーション」(AIが事実に基づかない情報を生成すること) が起きにくいのがNotebookLMの大きな特徴です。

「新リリース会計基準における税務上の取り扱いで注意すべきポイントを簡単にまとめて」といった指示を出すと、読み込んだ記事のなかから情報を抽出してまとめてくれます。

ほかにも、IT補助金のような行政が配信するPDF資料を読み込ませて、補助金の受給可能性や内容について質問できる「IT補助金チャットボット」などを作成してみるのもよいでしょう。

NotebookLMにはマインドマップ機能もあります。

複雑な制度に関する業務を行なうにあたっては、そもそも何から質問すればよいかわからない場合もあると思います。このマインドマップを使えば、質問の方向性を視覚的にまとめてくれます。IT導入補助金の対象者など必要な情報を抽出してくれるため、マインドマップ機能から質問を選ぶ、という使い方も可能です。

また、NotebookLMには音声概要機能があり、生成した内容を音声で聞くことも可能です。たとえば、税制改正大綱のような膨大なPDF資料も、読み込ませたデータを音声で概要として聞くことができます。倍速再生も可能なので、効率的な情報収集が期待できます。

Gensparkで増減分析

私が今回試したのは、「増減分析表のフォーマット作成」です(9)。増減分析自体は容量が膨大なので難しいですが、フォーマット作成であれば可能です。



9

白井 勘定科目が変わった際に、将来も使えるように関数も組み込んだフォーマットを作成するのは、非常に時間がかかる作業でしたが、これをAIEージェントにお願いし

たところ、簡単に作成できました。

Gensparkの「Aシート」というExcel分析に特化した機能を使います。

プロンプトの作成にはかなり工夫を凝らしましたが、「増減が1億円以上かつ30%以上の増減があったらフラグを立てる」、自分の好みに合わせて「条件付き書式を設定する」といった細かな指示を書き込みました。そして、2期分の残高試算表データを添付します(1)。

Gensparkは指定した様式に従って増減分析の基礎ファイルを作成し、条件付き書式も自動で設定してくれます。

完成した増減分析表では、1億円以上かつ30%以上の増減があった箇所に赤いフラグが立ち、私が指定したとおりに条件付き書式が適用されています。これを見てコメントを書き込む、といった具合です。

指示するだけで、忠実な部下のように作業してくれるのです。この作業がわずか3分程度で完了しました。Excel作業は、今後このようなAIEージェントに任せてもよいレベルだと感じています。

Gensparkのスライド作成機能も非常に有用です。

たとえば決算短信PDFを読み込ませて、「複数枚のプレゼン資料を作成し、添付資料からわかること以外は言わないでください」といったプロンプトで依頼するだけで、瞬時に美しいスライド資料を作成してくれます(10)。



1



10

白井 役員向けのプレゼンテーション資料のようなレベルのものが、わずか5分弱で作成できるのです。

このときのプロンプトに特別な工夫は必要ありません。ただPDFをアップロードするだけで、このような分析結果のスライドが完成します。

さらに、経費精算データから不正な経費使用を検出することも可能です。内部監査の担当者にとっても非常に大変な目視チェック作業をAIに任せることができます。

経費精算データをGensparkに「内容をチェックし、問題があれば修正案を提示してください」と指示して添付すると、AIが「重大な問題が23件あります」といったかたちで報告してくれます。領収書がないものや、明らかに不自然な高額の宿泊費などを指摘し、修正案まで提示してくれるのです。これにより、人間が目視で1つひとつ確認する代わりに、AIが不正の当たりを付けてくれるため、作業効率が格段に向上します。

今後、このようなAIEージェントが、私たちの「部下」になり得る時代が来るでしょう。

(2025年6月15日談) ●

※本稿に掲載の動画は、2026年7月まで視聴可能です。
※お使いの環境によっては、動画の視聴等ができない場合があります。